

学校図書館ボランティアを組織する

庭井 史絵

1. はじめに

学校図書館に関心を持つ人の情報交換の場として、sl-shock というメーリングリストがある〈<http://www.egroups.co.jp/group/sl-shock/>〉。3年前に発足し、200人余りのメンバーが学校図書館や学校教育、子どもの本、情報リテラシーについて意見を出し合ったり、情報を提供したりしている。

このメーリングリストに、新潟中越地震で大きな被害を受けた小千谷市の学校図書館司書が参加しており、震災直後から学校や子どもたち、図書館の様子を発信してくれた。このことがきっかけとなって、新潟中越地方における「学校図書館ボランティア」が発足した。sl-shock の事務局としてこれらの活動を取りまとめた経験を報告し、自分たちの専門性を生かしたボランティアの進め方について考えたいと思う。

2. 「学校図書館に何ができるか？」

新潟中越地方に地震が起きた直後、メンバーの安否や現地の状況を尋ねるメールがsl-shock に投稿された。このメーリングリストには、阪神・淡路大震災で被災した図書館関係者やボランティア経験者も参加していたので、被災した学校図書館をどのように支援したらよいのか、このような状況に置かれた子どもたちにとって本やおはなしはどのような力を持っているのかなど、活発な意見交換がなさ

れた。例えば、図書館の復旧には一般のボランティアだけではなく、分類や配架、図書館サービスについてよく知っている人の手が必要であること、読み聞かせや紙芝居が子どもたちの不安を癒す力を持っていること、一時的な（緊急の）活動に加えて、継続した息の長い支援が不可欠であること、外からの支援を地域の活動にうまく結び付ける必要があることなどが話題としてのぼった。

メール上での意見交換をしつつ、最初にとった行動は募金口座を作ることだった。同時に、現地で何が必要とされているのか、どんな支援が可能なのかを探るため、長岡市立図書館へ行って話を聞き、教育委員会と連絡を取り合い、ホームページで震災後の様子発信している学校に直接メールを送った。その結果、最初にイメージしていた「書架が倒れるなど、被害を受けた学校図書館の復旧」はそれほど必要ではなく、「分類など関係なくつめこまれた本の整理」「読み聞かせなど子どもたちへの心のケア」が求められていることが分かった。

募金は各方面から寄せられ、加えて図書館用品を扱う企業からは補修用品の、出版社からは本の寄贈を受けることができた。ボランティアに行ってもよいという人も集まりはじめた。11月21日現地でのボランティア活動が始まった。交通網が遮断され、鉄道と代行バスを乗り継いで新潟入りする必要があったが、現在までに80名以上のボランティアが6つの



“新潟中越地震 学校図書館ボランティア”のブログ

小学校に計22回訪問し、現在も継続中である。

3. 情報メディアの活用

今回のボランティア活動ではインターネットを中心とした情報メディアが効果的に利用された。そもそもの発端はメーリングリストでの意見交換であり、その後の募金集めやボランティア募集といった情報もメーリングリストからメーリングリストへと広がっていった。実際に現地に行くようになると、その活動内容や写真、申し送り等を共有するために、Web上のブリーフケースやフォトアルバム、スケジュール機能を活用した。

参加者がメーリングリストのメンバー以外にも広がった12月半ばには、“新潟中越地震学校図書館ボランティア”のブログ（<http://milch.cocolog-nifty.com/slshock/>）を立ち上げ、訪問先別の活動報告、ボランティア募集、募金、賛助企業の紹介、参加者からのコメント（感想）、読み聞かせした絵本の紹介などをリアルタイムで公開した。

その結果、短時間で人と人、人と情報を結び付けることができ、さまざまな活動が可能になった。特にだれでも簡単にコメントを書き込み、更新が容易で、写真や文書をわかり

やすく掲載できるブログが果たした役割は大きい。

4. 専門職団体として目に見える活動を

震災時の学校図書館への直接的なニーズは、食料品や住居、学校などに比べると、決して高くはない。そもそも、学校図書館の重要性や役割が各学校や自治体できちんと認識されていないことが多い。しかし「情報」や「読書」に対するニーズは確かにある。

私たちは、学校の中でこの役

割を「どんなときでも」担うのだという強いメッセージを、個人レベルだけではなく、組織的に発し続けなければならない。学校図書館を束ねる組織のホームページに、新潟に対するメッセージが掲載されることもなく、募金活動が展開されることもなく、学校図書館で働く者として、どんな活動ができるのか知恵や力を集める動きが何もないのはなぜか、という疑問と苛立ちがボランティア参加者の中にあつた。

子どもたちの心をケアするためにどんな本を手渡せばよいのか、地震について考える資料にはどんなものがあるか、現地では子どもたちに対してどんなボランティア活動が展開されているのか、情報を提供し、メッセージを発するだけでも専門職集団としての存在意義をアピールできる。組織による大きな枠組みと支援があつてはじめて、個人レベルの地道な活動が生きてくる。組織と個人のチームプレイが積み重なってこそ、学校図書館に対する外からの期待値も高まるのではないだろうか。心のケアとしての「読み聞かせ」に世間の注目が集まっても、学校図書館に対する期待がそれに伴わない現実を、私たちは重く受け止めるべきである。

（にわい・ふみえ＝慶應義塾普通部司書教諭）